

(2) 不登校対応における学校のベース～安全・安心な学校を目指して～

四万十市立中村中学校

川田 彩加

1. はじめに

近年、生徒の生活態度については落ち着いており、それにともなって学力もある一定を保っている。しかし、不登校生徒数は高止まりしている状況【表1】であり、中村中学校の課題として不登校生徒の出現率の高さがあげられる。数年前であれば勉強が分からなくなった生徒や生活面の乱れがいわゆる「荒れ」につながっていたが、学校で目に見える暴力やいじめという「荒れ」は減っている一方、家に引きこもり、学校へ来られない生徒が多くなっているのではないかと感じている。

そのため本校では令和2年度より不登校担当教員配置校の指定を受け不登校問題についての取組を始め今年度で2年目を迎えた。その取組の一端を紹介したい。

【表1】

| | 30年度 | 31年度 | 令2年度 |
|-----|------|------|------|
| 出現率 | 4.05 | 4.91 | 4.91 |

2. 不登校生徒の分析

(1) 特別支援教育の視点での分析

高知県教育委員会特別支援教育課「特別支援教育資料」によると中学校で通常の学級に在籍する特別支援教育のニーズが必要な生徒が7.1%いることが報告されている。

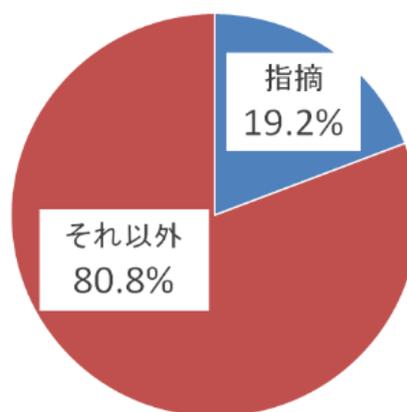
本校においても、これまでの調査から在籍する生徒と不登校生徒の中で発達障害など特別支援教育の視点で配慮を要する生徒の実態を整理・分析をしてみた【図1】。

全校生徒の中で発達障害などの診断を受けていたり、教育相談や巡回相談で指摘されている生徒の割合は19.2%であった。

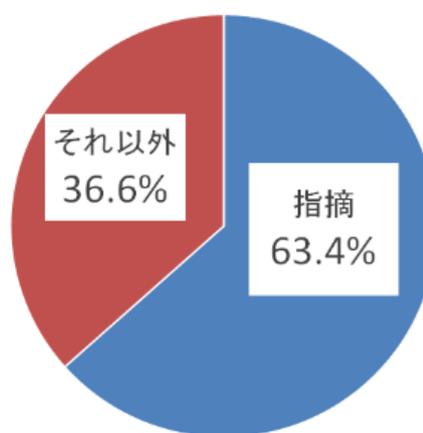
それに対して、不登校生徒の中で何らかの指摘を受けている生徒は63.4%と高い割合となっていた。

発達障害があるから不登校になるわけではなく、適切な支援が受けられなかったり、環境が合わなかったりする状況の中で二次障害として不登校になる場合がある。そのため、適切な支援に加え、学校や学級でユニバーサルデザインによる教育や多様性を推進することで、発達障害の二次障害の不登校を予防したいと考えた。

全校生徒



不登校生徒



【図1】

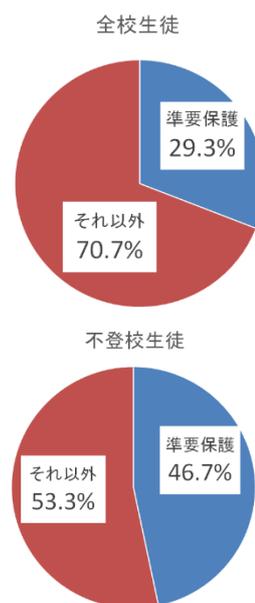
(2) 厳しい家庭環境にある生徒の視点での分析

高知県教育振興基本計画にもあるように、厳しい家庭環境にある生徒が増えている実態も顕著である。本校でも厳しい家庭環境にある生徒と不登校の生徒について分析をすることで、相関関係を調べた。

【図2】は厳しい環境（準要保護家庭）にある生徒の割合を示している。

全校生徒に対する準要保護の割合は29.3%であるのに対して、不登校（傾向含む）生徒に対する準要保護の割合は46.7%と全校生徒に比べて高くなっており、学力面や生活面などで厳しい家庭環境にある生徒に対する何らかの手立てが必要なが分かった。

厳しい家庭環境にある生徒には学校内だけで解決できる問題だけではないため、SCやSSW、医療機関などの外部機関との連携をすることが大切である。



【図2】

(3) 学力面の分析

厳しい環境にある生徒（準要保護家庭）の学力は上記以外の家庭の生徒の学力と比べるとどんな関係があるか調べた【グラフ1】。横軸にテストの点、縦軸に生徒の割合を示している。

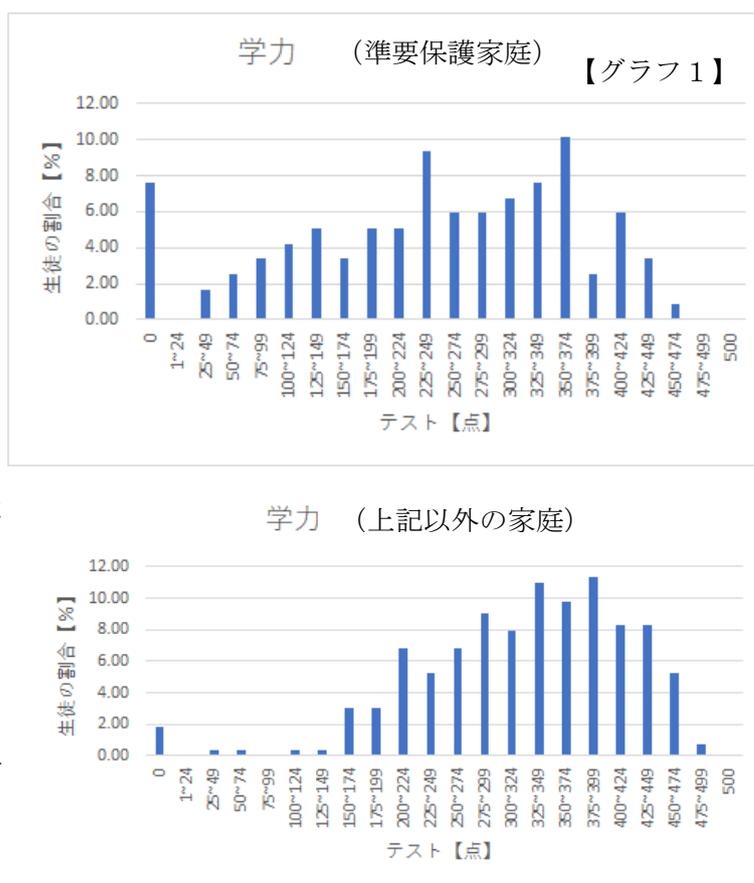
点数が0点の生徒は不登校生徒などテストを受けていない生徒である。

グラフを見ると、上記以外の家庭の生徒の点数のグラフは山が右寄りになっていて、その山の頂上は375～399点の位置にあることから上記以外の家庭の生徒の多くはある一定の学力の定着が見てとれる。

準要保護で厳しい家庭にある生徒の点数は、ばらけていることが分かる。

また200点未満に着目してみると準要保護の生徒は28%含まれていることから準要保護の生徒の学力は

厳しい事も予想される。そして0点の生徒の内8割は準要保護の生徒だということも念頭に置き、400点以上に着目してみると明らかに準要保護の生徒はそれ以外の生徒よりも少ないことも分かる。また、200点未満には不登校生徒や傾向がある生徒が83%いることから、学力の厳しい生徒や厳しい環境にある生徒への支援がある。その支援策として学級経営の在り方や、担任と生徒との関わりで特にうつむきがちな生徒への支援、宿題の精選等が必要になってくる。



3. 具体的な取り組み

不登校生徒の分析を踏まえ、以下のような取組を実施している。

(1) 職員の意識・対応に関して

* 特別支援教育（発達障害）について研修会の実施（校内研修）

（講師：西部教育事務所 宮上指導主事）

→特別支援教育理解

* 不登校生徒への理解の研修会の実施（校内研修）

（講師：佐田 SC、森島 SC）

→不登校生徒理解

* 医療機関と連携した支援会・講演会（校内研修）

（講師：高知大学教授 脇口先生）

→厳しい家庭環境にある生徒への対応等

* 月に3日以上欠席・遅刻・早退調べ

→早期発見早期対応へつなげる

* 生徒と教職員の信頼関係の構築

→学年職員室で仕事をする、担任が授業を見守りながら生活日誌をつける

* みんなが安心して過ごせる教室づくり、みんなが分かる授業づくり

→中中UDチェック表を用い、クラスの様子と授業をふり返る（年2回実施）



高知大学教授脇口先生による講演



授業を見守りながら仕事をする様子

中中UD(ユニバーサルデザイン)チェック表 (名前)
(①～④どれか1つに○をつけてください)

1. 教室（特別教室）内の物については、教材の場所や置き方などが一目でわかるように整理され、掲示物によって気がそれないように配慮されていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
2. クラスや授業内のルールはシンプルで誰もが実行できるものに設定されていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
3. 助けあったり、協力したりする場面を意図的に設定していますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
4. 授業のはじめに内容の進め方について全体的な見通しを掲示していますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
5. 授業の流れの中で、今、何が行われているのかが分かる工夫をしていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
6. 時間割など予定の変更などについてはできるだけ早く伝える工夫がされていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
7. (タイマーなどを活用して) 作業等時間の区切りが分かるように工夫していますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
8. 指示・伝達事項は聴覚的(言語)にだけでなく、視覚的(板書)に指示するようにしていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
9. 抽象的な表現、あいまいな表現をできるだけ避け、具体的な表現に置き換える工夫をしていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
10. どの生徒も発表できる機会を持つよう工夫がされていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
11. 授業がスムーズになるように毎回の進め方にある程度パターンを導入していますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
12. その子なりに参加できる集団づくり(班、小グループ、ペア活動等)をしていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
13. 集中が途切れた時やじっとしてられない時に、どうするかなどの具体的な行動の仕方を本人と約束していますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
14. 授業内容は聞くばかりでなく、具体的な活動を取り入れていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
15. 指示理解の弱い子に対して個別に説明を加えたり、言葉だけの説明で理解できない子には、絵や図等を使って補っていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない
16. 1日の中でほめられる場面づくりをしていますか
①かなりやっている ②やっている ③たまにやっている ④ほとんどやっていない

令和3年6月に行われたUDチェックアンケートでは、項目13.『集中が途切れた時やじっとしてられない時に、どうするかなどの具体的な行動の仕方を本人と約束していますか』の質問で「ほとんどやっていない」と答えた教員が28.6%と高かった。それを踏まえ、12月に行われた高知大学脇口先生の講演会の中で

・授業中に動いてもよい時間を取り、多動性を抑えるのではなく動ける保障の時間を設けること

・あらかじめ適切なルールや行動、約束を示すが、些細なことは気にせず、適切であると褒めること

・授業中に小休止やストレッチ体操を取り入れてみるのも有効

など、環境調整のポイントについてご指導をいただいた。

(2) 組織的な取り組みの体制

* 不登校に対する対応の流れを提示
(組織職員会で確認)

→どの教員も同じ方向で支援を行い、早期対応に努めた

* 毎週金曜日の支援会の実施

→本校の森島 SC に加え、
アウトリーチ方式を利用し、
佐田 SC を交えての支援会を行う

* 年間の校内研修の内容に生徒支援を位置付ける

→年間を通して、計画的に生徒支援を行う

* 確実な小学校からの引継ぎ

→特に気になる新入生に関しては、
入学前に新担任と顔合わせをして見通しを持って入学を迎えられるよう配慮



不登校に対する対応の流れ

※生徒の実態や家庭状況に合わせ、柔軟な対応を心掛けること。

| 段階 | 学校の対応 |
|------------------|---|
| 1 日目 | <p>【連絡あり】</p> <p>①欠席の理由をきちんと把握する。 ②病気が理由である場合は家庭でゆっくり過ごすように伝える。</p> <p>【連絡なし】</p> <p>朝の段階で担任か副担任が必ず連絡を入れ、子どもの様子を確認する。</p> <p>※夕方、欠席当日の生徒の様子を聞いて次の日の時間割や持ち物の連絡を行い、翌日スムーズに登校ができるよう配慮する。</p> |
| 2 日目 | <p>○生徒の様子を聞くとともに、保護者の様子から「行き渋り」の兆候がないか確認する。 ○欠席の理由があいまいな場合は、家庭訪問を行う。</p> |
| 3 日目 | <p>○理由がはっきりしていても、生徒や保護者に安心感を与えるように家庭訪問を実施する。 ○校内支援委員会を開くかどうかを検討する。</p> |
| 1 か月の累積が 3 日以上 | <p>○不登校の予兆が見られる場合は校内支援会を開き学校全体としての対応を行う。 ○家庭訪問は担任だけに限らずに s c や s s w、他教員などで行う。</p> |
| 1 学期間の累積が 10 日以上 | <p>○不登校傾向ととらえ、校内支援会を開き、提案された支援を行う。s c や s s w などと生徒や保護者をつなぎ、複数で対応をする。</p> |
| 1 年間の累積が 30 日以上 | <p>○不登校ととらえ、校内支援会で提案された支援を行い、必要に応じて関係機関を紹介する。</p> |



佐田 SC に入ってもらった支援会

小学校から確実に引継ぎをするためのスケジュール

○ 2 月～3 月

各小学校から管理職・3 年部教員・不登校担当が聞き取りを実施

→顔合わせの必要な生徒の確認をする。

小学校より顔合わせの必要な生徒の保護者に連絡を取ってもらい、

4 月以降中学校より連絡がある旨を知らせてもらう。

○ 4 月 1 日

新担任決定後、不登校担当から各家庭へ連絡をして来校日の日程の調整

→保護者によっては他の保護者と顔を合わせたくない場合があるため、
面談の場所等に配慮する。

○ 4 月 2 日～入学式前日

新担任と学年部長・不登校担当・通級指導教員などと保護者、新入生と面談

→教室の確認や入学式会場の見学、入学式当日の流れなどを確認する。保護者は困り感や、入学後に気を付けなければならぬことなどの情報共有をする。

(3) 学校内だけでは解決できないことへの対応

* 外部機関（ふれあい学級、福祉事務所家庭児童相談員、医療関係、児童相談所）との連携

→学校と外部機関とでブレのない支援を行う

(4) 個に応じた柔軟な対応

*生徒の少しのサインも見逃さない体制づくり

→学校や家庭でみられる生徒の主なサインを組織職員会で確認（早期発見）

*SC・SSW・支援員さんとの連携

→SCには生徒や保護者のカウンセリング、
SSWは厳しい家庭へのフォロー
支援員さんは学習支援や別室での見守り

*気軽に来室出来る相談室の設置

→昼休みや休み時間に相談室を開放して、SC
やSSWに相談できる体制を組み立てる

*第2別室の増室

→教室復帰の前段階にある別室に加え、学校の居場所となる別室②を増設

*タブレット学習の導入

→別室の生徒や家で過ごす生徒へタブレットを貸し出し、運動会や文化祭などの行事をリモートで見学したり、授業にリモートで参加する

生徒からのサインを見逃さないために

学校で見られがちなサイン

- 理由のはっきりしない欠席や「風邪」「頭痛」「腹痛」等の症状で長引いたり、断続化したりする。
- 身体の不調を訴えて保健室に行く機会が増える。
- 遅刻や早退が多くなる。
- 自己否定的な言葉やイメージを持つようになる。
- 休日の翌日や特定の教科、行事がある日の欠席が多くなる。
- 部活動や委員会活動を休みがちになったり、やめたがったりする。
- 友だちとの関わりが少なくなり、クラスの輪から離れがちになる。
- 学習への取組の様子が変わり、意欲の減退や成績の低下が見られる。
- 忘れ物が多くなる。ぼんやりすることが多くなる。

家庭で見られがちなサイン

- 前の晩には行く準備をするが、翌日になると起きてこない。
- 朝になると腹痛等の症状を訴えるが、欠席をするとその症状がなくなる。
- 学校に行こうとするとき、体が動かなくなることがある。
- 食欲がなく、顔色が悪い。
- 夜遅くまで起きていて、なかなか寝付けず、眠りも浅い。
- 家族と会話することを避けがちになり、部屋にこもる時間が長くなる。
- 理由もなく、イライラしたり、周りの人や物に八つ当たりしたりするようになる。



4. 成果と課題

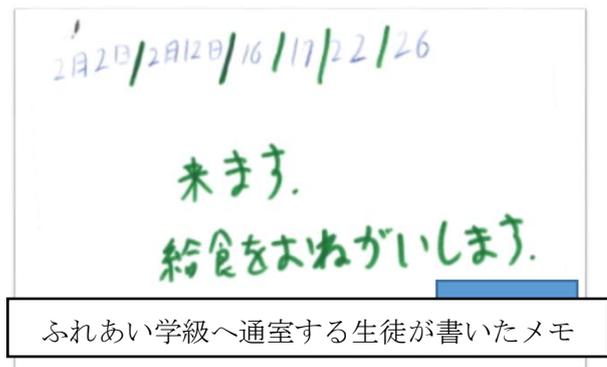
(1) 成果

* 小学校との確実な引継ぎにより、令和3年度入学生の全員が入学式当日に参加できた。

* ふれあい学級から給食を食べに学校へ登校できるようになり、放課後の部活動へ参加できるようになった。

* ふれあい学級から、学校復帰した生徒が数名いる。

* 前年度、一度も登校できなかった生徒が登校できる日数が増えた。



(2) 課題

* 不登校生徒出現率の高止まり

- ・ 不登校生徒の人数の減少には至っていない



第2別室のさらなる効果的な使い方について協議して、学校の居場所作りに努めたい

* 厳しい環境にある生徒への支援

- ・ 家庭への支援を行うにいたっていない



SSW等福祉分野の専門家の協力を仰ぎ、家庭の支援を行う。

- ・ 厳しい環境にある生徒は学力も厳しい生徒の割合が高いことが分析からわかっている



学校全体で学力向上、特に低学力の生徒への手立てを講じる必要がある。

5. おわりに

不登校担当教員が配置されて2年目を迎えた。1年目は主に特別支援教育の視点に立ち、生徒の個々に応じた支援を行ってきた。

2年目は昨年度の取り組みは継続しつつ、特に早期発見・早期対応について取組を行った。組織としてどの教員も同じ方向を向いて支援ができるよう、各教職員から今まで培った経験や考えなどを参考にさせてもらいながら、若年教員も同じように支援ができるように『不登校対応の流れ』を年度初めの組織職員会で確認をした。その結果、若年教員や養護教諭から不登校担当教員へ報告、相談の件数が多くなり、SCやSSWなどと連携をして支援した例が数多くある。しかし、生徒支援に対して多くの教職員（担任・学年主任・SSW・SC・支援員）などが関わる中で、支援の方向性についてそれぞれの立場からの意見があり、集約できずに支援をスタートしてしまう場面もあった。いかに個々の考えを尊重して意思統一した支援をするかが来年度の課題である。

3年目となる来年度は、すでに不登校になっている生徒が一日でも多く学校へ登校できるよう、温かな雰囲気を受け入れられる別室作りに努める事、また別室や家でもタブレット等を使い、クラスメイトと同じ授業が受けられるような支援をしてきたいと考えている。全ての生徒が入学をしてから3年後、卒業式を迎える際に中村中学校へ入学してよかったと思えるような学校になるようにチームで取り組んでいきたい。